

作業現場で輝く利用者表彰式



とても緊張したけど、
楽しかったです！
頑張ります！

楽しかったです！
これからも頑張ります！！

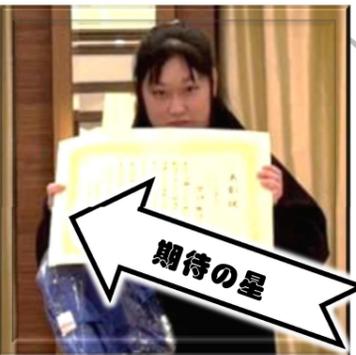


お二人とも普段見せることのない緊張 MAX な表情でしたが、表彰後にはホッとした表情に戻り、帰りの車内では「疲れた〜…」とグッタリしながらもニコニコキラキラしていました。
けやき社会センター 吉田



緊張した〜
輝くリーダーになった！

楽しかった！
ご飯おいしかった！！



朝から賞状を貰うまで緊張している様子でしたが、昼食時は笑顔で食べておりました。また表彰されるように作業を今以上に頑張っていたみたいです！これからも期待しています！
はるか 武藤



ジャンパー赤が良かった…
次はリーダーを狙うぞ〜！！

緊張したよ〜
ご飯美味しかった♪



2人ともとても緊張していて表情が硬かった様に思いましたが、恥ずかしがることなくとても立派な姿で賞状を受け取っていました。2人の今後の活躍が楽しみです！
おおぼん 竹内

〜作業現場で働く利用者表彰式とは？〜

千葉県社会就労センター協議会(SELP)主催で、会員事業所内で働く障害者で、現場リーダーとして模範となり成果を上げている利用者を「輝くリーダー表彰」、成長の可能性を大きく秘めた利用者を「期待の星表彰」とし、障害者の多様な働き方を顕彰する表彰式です。

SELP 協とは？



〜 そよ風のように街に出よう〜

S S T L

つくばね通信



社会福祉法人つくばね会
代表 千葉県我孫子市都部新田37-2

TEL 04-7187-1944
FAX 04-7187-1947

HP <http://tukubanekai.sakura.ne.jp/>

編集・発行：けやき社会センター・はるか
おおぼん・ふれんず・楓・サポートセンターけやき

1994年8月24日 第三種郵便物承認
2024年12月4日発行（毎月12回2・4・6・8の日） 通巻第5565号
発行人 埼玉県障害者団体定期刊行物協会
川口市芝新町15の9 頒価 50円
郵便振替 0010008411223

私には大学生と中学生になる二人の息子がいます。
長男は大学生になり、アルバイトをしたり、色々な人と関わったりする中で「少し大人になったな」と感じるが増えました。三歳の頃からサッカーを始め、高校生まで続けてきました。中学3年生の時、公式試合で相手との接触により、腓骨骨折（手術・全治9か月）してしまい初めての挫折。高校生の時は負けず嫌いを前面に出し、周囲の人とボタンの掛け違いで誤解を招き、3か月の部活動停止で草むしり等の奉仕活動を行う事もありました。長男も自分の事として苦勞してきましたが、私自身も親として沢山の葛藤を経験しました。そんな長男も、今では私の良き理解者の一人になりつつあります。

そして次男。次男は思春期から反抗期、中二病？真っ只中です。自分で自分と周囲を比べ、周囲からも比べられ、色々な情報が手に入る現代では、私の時代とは比べ物にならないくらいの葛藤があるのだと思います。反抗期は親と距離をとったり、反抗できるようになる事は成長の証であり、次男自身も気持ちのコントロールができない時なんだと、理解しつつも、いざ次男の言動や態度をみると言い過ぎてしまったり、ぶつかることも多くなっていました。

何度かぶつかりあいをしているのを長男がみると、「ちょっと出掛けたら？」「部屋で本とかテレビみたら？」と、外出での気分転換や、プライベートな時間を作ればと提案してくれました。息子の言葉に甘え、友達とカフェに行ったり、ボクシングジムに行ったりと、自分の時間を持つ事で、次男に対して適度な距離を持つ事ができ、ぶつかりあいも少なくなりました。私自身、気持ちに余裕がなくなっていたんだと気づかされました。

そんな時に次男の事で勧められた本『不安を味方にして生きる 著者 清水研』。
「この中には MUST（～なくてはならない）と WANT（～したい）と相反する自分が存在している。MUST は必要であるが、努力しても報われない感覚が続けば自己否定につながる。WANT の声が聞こえないと自分がわからないという悩みや生きている実感が失われる。大切なのはふたつの心のバランスである」本の中に書かれていたこの言葉。

日々の中で、「どちらの心の声」にも、耳を傾けていきたいと思います。 （楓 管理者 青木 恭子）

「就労選択支援事業スタートアップセミナー研修に参加しました！」

10/15(火)TKP ガーデンシティ千葉にて、標記の研修が開催されました。令和7年10月からスタートする事業で、「働きたい！」という障害がある方に対して、自分に合った支援機関選びや仕事探しができるようサポートする、関係機関との橋渡しを担うサービスです。対象者は、就労移行支援や就労継続支援をすでに利用している、またはこれから利用を考えている方です。また、特別支援学校では、各学年で就労アセスメントの実施や職場実習のタイミングで就労選択支援の利用が可能です。障害がある方が自身の適性や希望に合う就労先に繋げることを目的としています。

研修会の参加者は同業種から支援学校の先生など多岐にわたりました。参加者が幅広かったので、話も就労移行関連だけではありませんでした。お話しくださったのは、この事業を担当する国の専門官です。研修を受けて思ったことは、「利用者の人生に関わる大きな分岐点になること」「よりの確で丁寧なアセスメントが必要でスキルを磨かないといけない」「多角的な視野を持つことが大切」「自分たちだけでやろうとしても難しいので他機関との連携が大切だし、協力が必要、関係性を築かないといけない」「職業センターや就業・生活支援センターとの違いって何だろう？」「地域の社会資源はもちろん、周辺の情報も頭に入れて、理解しておく必要がある」「生半可な気持ちでは出来ない、覚悟が必要…」など、感じることも、考えることは沢山ありましたが、専門官は覚悟を持って望んでいることがはっきり伝わりました。やるのであれば、私達も覚悟と責任を持ってやらなくてはならないと思います。

障害があっても働く場所が選べる、範囲が広がる、1つでも多くの選択肢がある、理解者がたくさんいる、未来が開ける、という状況を作りたい。それが当たり前になってほしい。検討部分の段階もあるので、今後の動きにも注視していきたいです。この事業を前向きに、取り組んでいきたいと思いました。

(はるか 大野 有珠)

「福祉のきっかけ」

営業や経理の仕事をしていた私はもともと全く福祉には関係ないところで仕事をしていました。

学校を卒業後に初めて就職した職場で、一つ上の先輩の女性Kさんにお世話になっていました。彼女は社会人になりたての私に様々なことを教えてくれました。その後も年に数回は食事をしたり、家に泊まることもあり親しくしていました。ある日「隣の公園に作業している人が家を覗いて、私の悪口を言っている」と話すようになりました。その頃、病気の知識がなかった私はおかしいことを言うなと思っていたのですが、今思えばどんどん症状がひどくなっていったので、当時近隣の精神科病院に行ったらどうかと助言したことを覚えています。

彼女は現在も入院しています。病名が告げられたときに、お母様の「あの子はあの子じゃなくなった」という言葉が今もはっきりと残っています。家族ではない私でもショックを受けましたが、毎日関わる家族の衝撃はその何倍にもなるものであったと思います。

子育てが落ちついたころ、平成18年から福祉サービスの仕事に携わるようになり、今は相談支援専門員です。時々彼女のことを思い出します。強い気持ちから福祉へという流れはなかった私ですが、彼女のことは今につながる一つのきっかけだったのかなと思います。病気になったり、障害を告げられたときにどんな支援者に出会って来たかで、その後の本人や家族の人生が変わることもあります。本当にその方にとって必要な話ができる存在でありたいと思っています。

(サポートセンターけやき 山崎 文子)

「支援員として・・・」

令和6年9月よりつくばね会に帰ってきました植木です。約6年間離れていましたが、温かく迎え入れていただき利用者、職員の皆様に感謝をしています。離れていた期間ですが、児童発達支援施設で、発達障害児の子どもたちに療育提供をしていました。勤めていた中で多くの事を学び、大切と感じたことは多くありますが、中でも大事だと感じたことが利用者の行動理由を理解し対応をする事です。

児童発達支援では1歳半～5歳の未就学の子どもたちが来ており、言葉が出ていない子や、相手の事を見ない子、また、たくさん話が出来ても、実は言葉の意味を半分以上理解できていない子など様々な子ども達が来ていました。その為、子どもの伝えたい気持ちの把握をできるよう子どもたちの行動観察を多くしており、起こした行動に対して、その子が何を得られたかというのを注目するようになりました。あくまで一例ですが、“欲しいものがあり、指差しや「〇〇ください。」と言ったことで、欲しかったものが得られた。”“やりたくないものがあり、怒って暴れたことで、やらないで済んだ。”…等。起こす行動には必ず理由があり、その理由に気づき支援を行なっていくことが支援員として必要な事でした。

子どもたちの行動ではありましたが、大人相手でも同様の対応が求められることもあるので、対象の方が起こした行動に対して「何故？何を得られた？」と考え、行動をするように心がけ対応をしています。また、その行動を行った時に、体調面や気温、利用者の特性など、その利用者にとって良い事、悪い事も見極めて判断していくことはとても重要であると感じています。それぞれの行動に対して支援を行なう中で、絶対の答えは無いと思っていますが、少しでも利用者の皆様が楽しく生活できるようにサポートをしていきたいと思っています。

(けやき社会センター 植木 恒太郎)

「定着支援の現場から」(定着支援の概要はQRコードを参照してください)

現在ほるかでは定着支援を23名利用されています。そのうち外部機関（つくばね会以外の福祉サービスを利用して一般就労しほるかの定着支援を希望された方）では6名いらっしゃいます。東葛地域の定着支援事業にて外部機関の受け入れを行なっている定着支援事業所はとても少なく、ほるか定着のブランディングの構築などにより、市内を初め県外や市外の関係機関からもご紹介いただきありがとうございます。ほるか移行の利用者であった方の定着支援は、普段の訓練でのラポール（信頼関係）ができていますのでやりやすいのですが、外部機関からとなるとイチから関係性を築かなければならず、時間が掛かる傾向にあります。都内下町のスーパーに勤めるAさんも外部機関からの利用者です。レジの仕事をしています。とても真面目で休まずレジミスも少なく仕事を安心して任せられるとの企業評価でした。障害により声を出すのが難しいAさんや企業の悩みは、声が小さいことによりお客様からのクレームが多いとのことでした。本人と面談して「声を出しにくい障害を持っています」と名札の上にお詫びカードを付けてお客様に見てもらえるよう可視化を提案し、本人及び企業の手承を得てレジを行なうことになった結果、「クレームがほとんど無くなり安心して業務に励むことができるようになった」「頑張ってるね、などの励ましもいただいた」とのことでした。その効果を本人も企業も感じて、ほるかとのラポールがさらに促進する結果となりました。正直このやり方が正しいか分かりません。本来このようなものを必要とせずに、また障害の有無にも関わらず社会が寛容であってほしいと思いますが、本人や企業にとってもWIN-WINになる支援とすることが定着支援には重要なのです。

(はるか 堀辺 欽也)



〈 職員として思う「津久井やまゆり園事件」について 〉

始めに「津久井やまゆり園」で被害に遭われた方々に心よりお見舞い申し上げますと共に、亡くなられた方やそのご家族には、心よりお悔やみ申し上げます。

原稿の依頼があつてから、改めて事件の内容等を検索しましたが、事件発生から時間が経過しているため、様々な情報が知れる一方、真実とは異なる情報も多々ある事に驚きました。思想の自由・表現の自由と、自由が独り歩きしている状況に現代は個人の判断で情報も収集する必要がある事を再認識させられました。

この事件を題材にした小説が2017年に、辺見庸氏により「月」が発表されました。そして、2023年には映画となり上映されました。（2024年9月にDVD販売された）

この映画の監督をした石井裕也氏のインタビューの中から引用させていただきます。「条件さえ整えば、人は誰でも加害者になってしまう。だからこそ、暗部に目を光らせ、映画を通して見つめる」・「加害者が特別に悪人だったわけではなく、社会の目が届かない場所に置かれると誰でも加害の可能性がある」とおっしゃっていました。映画には、障がいを持った方も多数出演されておりますが、制作・配給元の担当プロデューサーからは、「障がい者を映画に出すな」と言われたそうです。そして、編集も終わり最終段階の時点で制作中止を通告され、お蔵入りの危機もあったそうで、他制作会社の単独で配給することに決まったとの事でした。

*映画の冒頭には「一部の障がい者は声を上げられない」というテロップが出てくる。

石井監督は、今回できる限りの取材をし、重度障がい者の方にもお会いして、コミュニケーションを取り、そこで生きているということの不思議さ、面白さ、幸せを強烈に感じたとも語っています。

私は福祉の仕事に就き、2024年4月で24年目になりました。（ちょうど2000年から福祉の仕事に関わっています。）しかし、入所施設での勤務の経験はなく（学生時代に実習でお世話になる事もなく、数か所の見学に行った事がある程度）、事件が報道された時は、現場のイメージが沸きづらく認識まで時間がかかりました。日々、捜査が進展していき事件の背景がメディアで報道される度に、自分自身の勉強不足な面も知る事と共に、元支援員だという事を知り、更に心を痛めました。事件の当日に、「自分が勤務していたら、利用者と職員の事を守る事ができたであろうか？」日頃の犯人との関わりの中で、「人間性を見抜けていたか？」（聴取より：勤務中に暴言・暴行があった）と、自問自答の繰り返しでした。

私は数年間虐待防止マネージャーを担当しており、日々ニュース等の障害者虐待等記事の検索や研修を受講する機会に恵まれました。虐待防止研修の中で「危険性のある芽（日頃のチェックリスト等）」を摘む事が重要とされておりますが、私が以前より思っている事は「殺人や虐待」を犯してしまった者のその時の気持ちや心理は、その者にしか分からないと言う事です。日頃支援をしている私たちでは到底理解できない事であり、罪を償う事は勿論、国には徹底的にその者からの情報を集約し、誰もが情報を得られるようにして欲しいと思います。様々な人達が事件や犯人の心理を少しでも理解する事で、このような事件が起こらないようになればと願います。利用者の方々を守る存在になる事も必要ですが、障害を持った方々に対しての「社会の目」も良い方向に進むように願っております。

（ふれんず 栗原 大介）

利用者に対して行っている事

おおぼんの利用者は現在24名で18歳から78歳と年齢層も幅広い方々が、毎日元気に通所しています。その中でも小規模作業所時代からの利用者は、高齢となり65歳を超えた方が5名います。

高齢の利用者への支援は様々なタイミングで生じます。段差がある時は躓いて転ばないように声掛けや手を取ることや肩を貸すなどの安全確保。食べ物を喉に詰まらせないように近くで見守りの事故防止。余暇活動時は、長距離で歩くことが困難な場所での車イス手配やトイレの位置確認など、様々な場面で必要な支援をしています。その中で私は特に高齢の利用者に対し、若い頃から通いなれた思い出がある場所で穏やかに過ごしてもらいたいと思い、ご本人が望むのであれば出来るだけ長く利用してもらいたいと考えています。

最近の出来事では、高齢の利用者が職員の手伝いをしようと、自身では持てない重たい物を持つとした為、助けたいという気持ちを受け止めた上で、誰かと一緒に運ぶか、その方が持てそうな物を提案し対応しました。他の場面では、新しく入った若い利用者の「〇〇さんは出来ていない」の発言に対し、「出来ていない」ではなく、「前は出来ていた」と伝え、年齢を重ねることで出来なくなってくることを仲間に見下されることがない様に、これまでの努力と経験を認めた尊厳のある対応を若い利用者にも理解を促しました。

1日の半分はおおぼんで過ごす利用者が、毎日楽しく「明日も来たい」と思える場所を作る為に利用者の年齢または本人に合った支援を今後も続けていければと思います。（おおぼん 植木 しほ）

ふれんず 秋の活動様子

暑かった夏が終わり、冷たい風が吹く時季に突入しました。公園活動ではどんぐりを拾ったり、落ち葉を集めたりと子ども達の秋遊びを楽しむ様子を見て、もうそのような時季か、と時間の流れの早さに驚いています。

さて、秋のイベントと言えばやはりハロウィン！10月31日にハロウィンパーティーを行いました。今年は皆さんにおぼけとカボチャの顔を描いてもらい、怖い顔や可愛い顔など、個性豊かなおぼけ達が壁面からお出迎えです。おやつとして、コストコのハロウィン仕様の大きいチョコレートケーキを用意。ケーキの上にはそれぞれおぼけ、カボチャがワンポイントとして乗せられていて「食べるのがもったいない！」と丁寧にキャラクター部分だけを避けて最後に食べる方、最初にキャラクター部分を食べる方など、食べ方にも個性が見られとても興味深かったです。

11月9日には毎年恒例となる、おおぼん畑でのサツマイモ掘り体験を行いました。初めは土に深く埋まっているサツマイモが中々出てこず悪戦苦闘の様子でしたが、「こっちにあるよ！」「一緒にやろう」など皆が積極的に声を掛け合った事で、力を合わせてサツマイモを沢山取ることができました！

ふれんずでは季節ごとのイベントの日は勿論、今年度より事前のタイムスケジュールや曜日によって公園の場所を設定しています。「もうすぐおやつの時間だ！」「今日は〇〇公園！」等、職員が声掛けを行う前に皆さんが自主的に次の行動に移すことが着実に増えてきています。場面の切り替えが苦手だった方もタイムスケジュールを設定してから見通しが立ちやすくなり、より安心してふれんずを利用されている様子がみられています。今後も皆さんにとって笑顔になれる場所を継続していきたいと思っています。（ふれんず 白井 花帆）





けやき社会センター

今年のけやき社会センターの一泊旅行は那須へ行ってきました。
期間は11月7日～8日の一泊二日、けやき社会センター20周年という記念すべき年ということもあり、けやきバスとレンタカーバス、ハイエースの計3台を使用し、利用者31名、職員16名の計47名の大所帯での旅行となりました。

行きの車内から「もうお腹すいた～(^O^;)餃子早く食べたい！」と昼食予定の宇都宮餃子を楽しみにしていました。お店に着くと「まんぷく餃子定食」が盛大にお出迎え。焼餃子から水餃子、蒸し餃子等、色々な種類の餃子を堪能し、皆さん大満足でした。続いての行き先は「ティピアミュージアム」へ。期間限定で「となりのトトロ ぬいぐるみ展」が開催されており、皆さん知っているキャラクターを見つけて写真を撮ったり、ネコバスに乗り込んだりと記念となる写真をたくさん撮ることが出来ました。

宿泊先は「ホテルエピナール那須」というホテルで、外観からロビー、お部屋ととても広くキレイでした。夕食では大きな宴会場を貸し切り、カラオケ大会を開催！大きなステージで歌って踊って大盛り上がりでした。普段の活動よりも運動量多く、いい汗をかきました。

2日目は「りんどう湖ファミリー牧場」へ行きました。それぞれ思い思いのアトラクションを体験した後は待ちに待ったBBQ 食べ放題！肉、肉、野菜！肉、肉、野菜！を意識しながら時々肉、肉、肉！とBBQの醍醐味を皆さんで感じ、最高に楽しい時間を過ごすことが出来ました。

来年はまたどこに行こうかとすでに帰りの車内で話題に出ている、皆さんのエネルギーに感心させられた一泊二日でもありました。

けやき社会センター 吉田 寛貴

はるか就労継続B型

はるか就労継続B型は、10月17(木)、18日(金)と2日間にかけて那須塩原へ旅行に行っていました。今年度は新しい利用者の方が2名加わり利用者10名、職員3名の総勢13名が旅行に参加されました。

1日目は「那須どうぶつ王国」を目指し出発！到着して早々、とても大きなアムールトラがお出迎え。あまりの大きさにガラス越しではありますが「怖いよ…」と後ずさりしながら離れる方もいらっしゃれば「すごい！かっこいい！」と感動し何枚も写真を撮る方もいらっしゃいました。特に人気だったのはリスの森でした。13匹のリスのいる森に実際に入ることができ、あまりの近さに「踏んじゃいそう！でも可愛い！」といつも感じるこのできない環境を楽しめる姿が見受けられました。

2日目はコミュニティーガーデン那須倶楽部にて、オリジナルマグカップとお皿作りをしてきました。用意された沢山の種類のシールから好みの物を選び、マグカップとお皿に貼り付ける作業を行いました。完成品を見た店員さんから「みんな上手！」と褒められみなさんととても嬉しそうにされていました。

帰りの車内では既に来年度の旅行先を考える利用者の方が何名も……。

日頃できない体験が多くあった大満足の旅行となりました！

はるか 舟山 和希



おおばん

11月21・22日、おおばんも那須方面へ足を運びました。今回は生活ホーム北斗の利用者含め総勢33名、2台のバスで出発です。

1日目は2つの体験、まずはそば打ち。グループに分かれ、水回しから切るまでをやりました。おおばんは以前手打ちうどんを作っていたので、見事な手さばきの利用者もいましたが、切ると細かったり、きしめん風だったりいろいろで顔は真剣そのもの。そば指導の方は食後にトランプ、輪っかつなぎ、剣飲みこみなど手品でみんなをアツと言わせ、楽しませてくれました。2つめはバター作り体験です。「挫折禁止」の標識通り、みんなで10分間ピンを振り続け、腕が疲れたところでできあがり、最後はクラッカーにつけてペロリです。

ホテルでは夕食後の恒例！クイズ大会で盛り上がりました。那須、栃木、おおばんにちなんだクイズが続き、当たってもハズしても大歓声。1～3位には豪華賞品があり、みなさんホクホク顔でした。

2日目は朝風呂、朝食バイキングのあと那須どうぶつ王国へ。トラの背中や爆睡スナネコ、カピバラ温泉、ペンギン散歩を見たり、犬や猫をなでたりふれあつたりの3時間。こうして那須連山と紅葉に別れを告げ、帰路のバスではおやつを食べる、歌う、おしゃべり、夢の中といつまでも元気いっぱいのおおばん旅行でした。

おおばん 広瀬 美紀

～那須旅行～

